風姿花伝

夫、申楽延年の事態、其源を尋るに、或は仏在所より起り、或は神代より伝るといへども、時移り、代隔たりぬれば、其風を学ぶ力、及がたし。近比万人のもてあそぶ所は、推古天皇の御宇に、聖徳太子、秦河勝に仰て、且は天下安全のため、且は諸人快楽のため、六十六番の遊宴を成て、申楽と号せしより以来、代代の人、風月の景を仮て、此遊びの中だちとせり。其後、かの河勝の遠孫、この芸を相続ぎて、春日・日吉の神職たり。仍、和州・江州の輩両社の神事に従ふ事、今に盛なり。

されば、古を学び、新を賞する中にも、全風流をよこしまにする事なかれ。ただ、言葉卑しからずして、姿幽玄ならんを、うけたる達人とは申べき哉。

先、此道に至らんと思はん者は、非道を行ずべからず。但、歌道は風月延年のかざりなれば、尤これを用ふべし。

凡、若年より以来見聞及ぶ所の稽古の条条、大概注置処也。

　一、好色・博奕・大酒。三重戒、是、古人掟也。

　一、稽古は強かれ、情識は無かれ、と也。

風姿花伝第一年来稽古条条

　　　　七歳

一、此芸に於ひて、大方七歳を以て初とす。此比の能の稽古、かならず、その物自然とし出だす事に、得たる風体あるべし。舞・はたらきの間、音曲、若は怒れる事などにてもあれ、風度し出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさすべし。さのみに「よき」「悪しき」とは教ふべからず。あまりにいたく諌むれば、童は気を失ひて、能物くさく成たちぬれば、やがて能は止まる也。

ただ、音曲・はたらき・舞などならではせさすべからず。さのみの物まねは、たとひすべくとも、教ふまじきなり。大場などの脇の申楽には立つべからず。三番・四番の、時分のよからむずるに、得たらむ風体をせさすべし。

　　　　十二三より

　此年の比よりは、はや、やうやう声も調子にかかり、能も心づく比なれば、次第次第に物数をも教ふべし。

先、童形なれば、なにとしたるも幽玄なり。声も立つ頃也。二の便りあれば、悪き事は隠れ、よき事はいよいよ花めけり。大かた、児の申楽に、さのみに細かなる物まねなどはせさすべからず。当座も似合はず、能も上らぬ相なり。但、堪能に成ぬれば、なにとしたるもよかるべし。児といひ、声といひ、しかも上手ならば、なにかは悪かるべき。さりながら、此花はまことの花にはあらず、ただ時分の花なり。されば、此時分の稽古、すべてすべて易き也。さる程に、一期の能の定めには成るまじきなり。

此比の稽古、易き所を花にあてて、態をば大事にすべし。はたらきをも確やかに、音曲をも文字にさはさはとあたり、舞をも手を定めて、大事にして稽古すべし。

　　　十七八より

この比は又、あまりの大事にて、稽古多からず。先、声変りぬれば、第一の花失せたり。体も腰高になれば、かかり失せて、過ぎし比の、声も盛りに、花やかに、易かりし時分の移りに、手立はたと変りぬれば、気を失ふ。結句、見物衆もをかしげなる気色見えぬれば、はづかしさと申、彼是、ここにて退屈するなり。

此頃の稽古には、だだ指をさして人に笑はるるとも、それをばかへりみず、内にては、声の届かんずる調子にて、宵・暁の声をつかひ、心中には願力を起して、一期の堺ここなりと、生涯にかけて能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能は止まるべし。

そうじて、調子は声によるといへども、黄鐘・盤渉を以て用ふべし。調子にさのみかかれば、身なりに癖出で来る物也。又、声も年寄りて損ずる相なり。

二十四五

この頃、一期の芸能の定まる初めなり。さる程に、稽古の堺なり。声もすでに直り、体も定まる時分なり。されば、この道に二の果報あり。声と身なり也。これ二は、この時分に定まるなり。年盛りに向かふ芸能の生ずるところなり。

さる程に、よそ目にも、「すは上手出で来たり」とて、人も目に立つるなり。もと名人などなれども、当座の花にめづらしくして、立合勝負にも一旦勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と思ひしむるなり。是、返返主のため仇なり。これもまことの花にはあらず。年の盛りと、見る人の一旦の心のめづらしき花なり。まことの目利は見分くべし。

この比の花こそ初心と申頃なるを、極たるやうに主の思ひて、はや申楽にそばみたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事也。たとひ、人も褒め、名人などに勝つとも、これは一旦めづらしき花なりと思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直にし定め、名を得たらん人に事を細に問ひて、稽古をいや増しにすべし。されば、時分の花をまことの花と知る心が、真実の花に猶遠ざかる心也。ただ、人ごとに、この時分の花に迷て、やがて花の失するをも知らず。初心と申はこの比の事也。

一、公案して思ふべし。我が位の程を能能心得ぬれば、それ程の花は一期失せず。位より上の上手と思へば、もとありつる位の花も失する也。よくよく心得べし。

三十四五

此頃の能、盛りの極めなり。ここにて、この条条を極め悟りて、堪能になれば、定て天下に許され、名望を得つべし。若、此時分に、天下の許されも不足に、名望も思ふ程もなくば、いかなる上手なりとも、いまだまことの花を極めぬ為手と知るべし。もし極めずば、四十より能は下るべし。それ、後の証拠なるべし。さる程に、上るは三十四五までの頃、下るは四十以来なり。返返、此比天下の許されを得ずば、能を極めたりとは思ふべからず。

ここにて猶つつしむべし。此頃は、過ぎし方をも覚え、又、行く先の手立をも覚る時分也。この比極めずば、この後天下の許されを得ん事、返返難かるべし。

　　　四十四五

此頃よりは、能の手立、大かた変るべし。たとひ天下に許され、能に得法したりとも、それに付ても、よき脇の為手を持つべし。能は下らねども、力なく、やうやう年闌けゆけば、身の花もよそ目の花も失するなり。まづ、すぐれたらん美男は知らず、よき程の人も、直面の申楽は、年寄りては見られぬもの也。さるほどに、此一方は欠けたり。

この比よりは、さのみに細かなる物まねをばすまじきなり。大かた似合ひたる風体を、やすやすと、骨を折らで、脇の為手に花を持たせて、あひしらひのやうに、少な少なとすべし。たとひ脇の為手なからんにつけても、いよいよ、細かに身を砕く能をばすまじきなり。なにとしても、よそ目花なし。

もし此頃まで失せざらん花こそ、まことの花にてはあるべけれ。それは、五十近くまで失せざらん花を持ちたる為手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。たとひ天下の許されを得たる為手なりとも、さやうの上手はことに我身を知るべければ、猶猶脇の為手をたしなみ、さのみに身を砕きて難の見ゆべき能をばすまじきなり。かやうに我身を知る心、得たる人の心なるべし。

　　　　五十有余

この頃よりは、大かた、せぬならでは手立あるまじ。「騏麟も老ては土馬に劣る」と申事あり。さりながら、まことに得たらん能者ならば、物数はみなみな失せて、善悪見所は少なしとも、花は残るべし。

亡父にて侯し物は、五十二と申し五月十九日に死去せしが、その月の四日の日、駿河の国浅間の御前にて法楽仕。その日の申楽ことに花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり。凡その頃、物数をばはや初心に譲りて、やすき所を少な少なと色えてせしかども、花はいや増しに見えしなり。これ、まことに得たりし花なるがゆへに、能は、枝葉も少なく、老木になるまで、花は散らで残しなり。これ、眼のあたり、老骨に残りし花の証拠なり。

年来稽古　以上。

風姿花伝第二物学条条

物まねの品品、筆に尽くしがたし。さりながら、此道の肝要なれば、その品品を、いかにもいかにもたしなむべし。およそ、なに事をも残さず、よく似せんが本意なり。しかれども、又、事によりて濃き淡きを知るべし。

先、国王・大臣より始め奉りて、公家の御たたずまひ、武家の御進退は、及ぶべき所にあらざれば、十分ならん事難し。さりながら、能能言葉を尋ね、品を求めて、見所の御意見を待つべきをや。その外、上職の品品、花鳥風月の事態、いかにもいかにも細かに似すべし。田夫・野人の事に至りては、さのみに細に卑しげなる態をば似すべからず。仮令、木樵・草刈・炭焼・汐汲などの、風情にも成つべき態をば、細かにも似すべきか。それより猶卑しからん下職をば、さのみには似すまじきなり。これ、上方の御目に見ゆべからず。若見えば、あまりに卑しくて、面白き所あるべからず。此宛てがひを、能能心得べし。

　　　　女

およそ、女がかり、若き為手のたしなみに似合ふ事なり。さりながら、これ、一大事也。

先、仕立見苦しければ、さらに見所なし。女御・更衣などの似事は、輙其御振舞を見る事なければ、よくよくうかがふべし。衣・袴の着様、すべて私ならず。尋べし。ただ世の常の女がかりは、常に見慣るる事なれば、げには輙かるべし。ただ衣小袖の出立は、大かたの体、よしよしとあるまで也。舞・白拍子、又は物狂などの女がかり、扇にてもあれ、かざしにてもあれ、いかにもいかにも弱弱と、持ち定めずして持つべし。衣・袴などをも長長と踏み含みて、腰・膝は直に、身はたをやかなるべし。顔の持ち様、あをのけば見目悪く見ゆ。うつぶけば後姿悪し。さて、首持ちを強く持てば、女に似ず。いかにもいかにも袖の長き物を着て、手先をも見すべからず。帯などをも弱弱とすべし。

されば、仕立をたしなめとは、かかりをよく見せんとなり。いづれの物まねなりとも、仕立悪くてはよかるべきかなれども、ことさら女がかり、仕立を以て本とす。

　　　　老人

　老人の物まね、此道の奥義なり。能の位、やがてよそ目にあらはるる事なれば、是、第一の大事也。

　およそ、能をよき程極めたる為手も、老たる姿は得ぬ人多し。たとへば、木樵・汐汲の態物などの翁形をし寄せぬれば、やがて上手と申事、これ、校批判なり。冠・直衣、烏帽子・狩衣の老人の姿、得たらむ人ならでは似合ふべからず。稽古の功入て、位上らでは似合ふべからず。

又、花なくば面白き所あるまじ。およそ、老人の立振舞、老いぬればとて、腰・膝をかがめ、身をつむれば、花失せて、古様に見ゆるなり。さる程に、面白き所稀なり。ただ、大かた、いかにもいかにもそぞろかで、しとやかに立ち振舞ふべし。

ことさら、老人の舞がかり、無上の大事なり。花はありて年寄と見ゆるる公案、くはしく習ふべし。ただ、老木に花の咲かんがごとし。

直面

これ又大事也。およそ、もとより俗の身なれば、易かりぬべき事なれども、ふしぎに、能の位上らねば、直面は見られぬ物也。

まづ、これは、仮令、その物その物によりて学ばん事、是非なし。面色をば似すべき道理もなきを、常の顔に変へて、顔気色をつくろう事あり。さらに見られぬものなり。振舞・風情をばそのものに似すべし。顔気色をば、いかにもいかにも己なりに、つくろはで直に持つべし。

物狂

此道の第一の面白づくの芸能なり。物狂の品品多ければ、この一道に得たらん達者は、十方へわたるべし。くり返しくり返し公案の入べきたしなみなり。

仮令、憑物の品品、神・仏、生霊・死霊の咎めなどは、その憑物の体を学べば、易く、便りあるべし。親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るる、かやうの思ひに狂乱する物狂、一大事なり。よき程の為手も、ここを心に分けずして、ただ一偏に狂ひはたらくほどに、見る人の感もなし。思ひゆへの物狂をば、いかにも物思ふ気色を本意にあてて、狂ふ所を花にあてて、心を入て狂へば、感も、面白き見所も、定めてあるべし。かやうなる手柄にて人を泣かする所あらば、無上の上手と知るべし。これを心底によくよく思分くべし。

およそ、物狂の出立、似合ひたるやうに出で立つべき事、是非なし。さりながら、とても物狂に言寄せて、時によりて、なにとも花やかに出で立つべし。時の花を插頭に插すべし。

又云、物まねなれども、心得べき事あり。物狂は憑物の本意を狂ふといへども、女物狂などに、あるひは修羅闘諍・鬼神などの憑く事、これ、なによりも悪き事也。憑物の本意をせんとて、女姿にて怒りぬれば、見所似合はず。女がかりを本意にすれば、憑物の道理なし。又、男物狂に女などの寄らん事も、同じ料簡なるべし。所詮これ体なる能をばせぬが秘事なり。能作る人の料簡なきゆへ也。さりながら、この道に長じたらん書手の、さやうに似合はぬ事を、さのみに書く事はあるまじ。この公案を持つ事、秘事也。

又、直面の物狂、能を極めてならでは、十分にはあるまじきなり。顔気色をそれになさねば、物狂に似ず。得たる所なくて顔気色を変ゆれば、見られぬ所あり。物まねの奥義とも申つべし。大事の申楽などには、初心の人、斟酌すべし。直面の一大事、物狂の一大事、二色を一心になして、面白き所を花にあてん事、いか程の大事ぞや。能能稽古あるべし。

　　　　法師

これは、此道にありながら、稀なれば、さのみの稽古入らず。仮令、荘厳の僧正、並に僧綱等は、いかにも威儀を本として、気高き所を学ぶべし。それ以下の法体、遁世・修行の身に至りては、抖擻を本とすれば、いかにも思ひ入たる姿かかり、肝要たるべし。但、賦物によりて、思ひの外の手数の入事もあるべし。

修羅

これ又、一体の物なり。よくすれども、面白き所稀なり。さのみにはすまじき也。但、源平などの名のある人の事を、花鳥風月に作り寄せて、能よければ、何よりもまた面白し。是、ことに花やかなる所ありたし。

これ体なる修羅の狂ひ、ややもすれば、鬼の振舞になる也。又は舞の手にもなる也。それも、曲舞がかりあらば、少し舞がかりの手づかひ、よろしかるべし。弓・箭ぐひを携へて、打物を以て厳とす。その持ち様・使ひ様をよくよくうかがひて、その本意をはたらくべし。相構構、鬼のはたらき、又舞の手になる所を用心すべし。

　　　　神

　およそ、此物まねは鬼がかり也。なにとなく怒れるよそほひあれば、神体によりて、鬼がかりにならんも苦しかるまじ。但、はたと変れる本意あり。神は舞がかりの風情によろし。鬼には更に舞がかりの便りあるまじ。

神をば、いかにも神体によろしきやうに出で立ちて、気高く、ことさら、出物にならでは神といふ事はあるまじければ、衣裳を飾りて、衣文をつくろひてすべし。

　　　　鬼

　是、ことさら大和の物也。一大事也。

凡、怨霊・憑物などの鬼は、面白き便りあれば、易し。あひしらひを目がけて、細かに足・手をつかひて、物頭を本にしてはたらけば、面白き便りあり。

まことの冥途の鬼、よく学べば恐ろしきあひだ、面白き所更になし。まことは、あまりの大事の態なれば、これを面白くする物、稀なるか。

先、本意は、強く恐ろしかるべし。強きと恐ろしきは、面白き心には変れり。抑、鬼の物まね、大なる大事あり。よくせんにつけて、面白かるまじき道理あり。恐ろしき所、本意なり。恐ろしき心と面白きとは、黒白の違ひ也。されば、鬼の面白き所あらん為手は、極めたる上手とも申べきか。さりながら、それも、鬼ばかりをよくせん物は、ことさら花を知らぬ為手なるべし。されば、若き為手の鬼は、よくしたりとは見ゆれども、更に面白からず。鬼ばかりをよくせん物は、鬼も面白かるまじき道理あるべきか。くはしく習ふべし。ただ、鬼の面白からむたしなみ、巌に花の咲かんがごとし。

唐事

　是は、凡各別の事なれば、定めて稽古すべき形木なし。ただ、肝要、出立なるべし。又、面をも、同じ人と申ながら、模様の変りたらんを着て、一体異様したるやうに、風体を持つべし。功入たる為手に似合ふ物なり。ただ、出立を唐様にするならでは手立なし。なにとしても、音曲もはたらきも、唐様といふ事は、まことに似せたりとも、面白くもあるまじき風体なれば、ただ一模様心得んまでなり。

この、異様したると申事など、かりそめながら、諸事にわたる公案なり。なに事か異様してよかるべきなれども、およそ唐様をばなにとか似すべきなれば、常の振舞に風体変れば、なにとなく唐びたるやうによそ目に見なせば、やがてそれになるなり。

大かた、物まねの条条、以上。この外、細かなる事、紙筆に載せがたし。さりながら、凡此条条をよくよく極めたらん人は、をのづから細かなる事をも心得べし。

風姿華伝第三問答条条

問。抑、申楽を始むるに、当日に臨んで、先座敷を見て、吉凶をかねて知る事は、いかなる事ぞや。

答。此事、一大事也。その道に得たらん人ならでは心得べからず。

先、その日の庭を見るに、今日は能よく出で来べき、悪しく出で来べき、瑞相あるべし。是、申がたし。しかれども、およその料簡を以て見るに、神事、貴人の御前などの申楽に、人群集して、座敷いまだ静まらず。さる程に、いかにもいかにも静めて、見物衆、申楽を待ちかねて、数万人の心一同に、遅しと楽屋を見る所に、時を得て出でて、一声をも上ぐれば、やがて座敷も時の調子に移りて、万人の心、為手の振舞に和合して、しみじみとなれば、なにとするも、その日の申楽ははや良し。

さりながら、申楽は、貴人の御出でを本とすれば、もし早く御出である時は、やがて始めずしては不叶。さる程に、見物衆の座敷いまだ定まらず、或は後れ馳せなどにて、人の立居しどろにして、万人の心、いまだ能にならず。されば、左右なくしみじみとなる事なし。さやうならむ時の脇の能には、物になりて出づるとも、日頃より色色と振りをもつくろひ、声をも強強とつかひ、足踏をも少し高く踏み、立ち振舞ふ風情をも、人の目に立つやうに生き生きとすべし。これ、座敷を静めんためなり。さやうならんに付ても、ことさら、その貴人の御心に合ひたらん風体をすべし。されば、かやうなる時の脇の能、十分によからん事、返返あるまじきなり。しかれども、貴人の御意にかなへるまでなれば、これ、肝要也。

なにとしても、座敷のはや静まりて、をのづからしみたるには、悪き事なし。されば、座敷の競ひ後れを勘へて見る事、その道に長ぜざらん人は、左右なく知るまじきなり。

又云、夜の申楽は、はたと変る也。夜るは、遅く始まれば、定りて湿るなり。されば、昼二番目によき能の体を、夜の脇にすべし。脇の申楽湿り立ちぬれば、そのまま能は直らず。いかにもいかにも、よき能を利すべし。夜は、人音忽忽なれども、一声にてやがて静まる也。然ば、昼の申楽は後がよく、夜の申楽は指寄りよし。指寄り湿り立ちぬれば、直る時分、左右なく無し。

秘義云、抑、一切は、陰陽の和する所の堺を、成就とは知るべし。昼の気は陽気なり。されば、いかにも静めて能をせんと思ふ工みは、陰気也。陽気の時分に陰気を生ずる事、陰陽和する心也。これ、能のよく出で来る成就の始め也。これ、面白しと見る心也。夜は又陰なれば、いかにも浮き浮きと、やがてよき能をして、人の心花めくは、陽也。これ、夜るの陰に陽気を和する成就なり。されば、陽の気に陽とし、陰の気に陰とせば、和する所あるまじければ、成就もあるまじ。成就なくば、なにか面白からん。又、昼の内にても、時によりて、なにとやらん、座敷も湿りて寂しきやうならば、これ陰の時と心得て、沈まぬやうに心を入てすべし。昼は、かやうに、時によりて陰気になることありとも、夜るの気の陽に成らん事、左右なくあるまじきなり。

座敷をかねて見るとは、これなるべし。

問。能に、序破急をばなにとか定べきや。

　答。これ、易き定め也。一切の事に序破急あれば、申楽もこれ同じ。能の風情を以て定べし。

先、脇の申楽には、いかにも本説正しき事の、しとやかなるが、さのみに細かになく、音曲・はたらきも大かたの風体にて、するすると、安くすべし。第一、祝言なるべし。いかによき脇の申楽なりとも、祝言欠けてはかなふべからず。たとひ能は少し次なりとも、祝言ならば苦しかるまじ。これ、序なるがゆへなり。二番・三番になりては、得たる風体の、よき能をすべし。ことさら、挙句急なれば、揉み寄せて、手数を入てすべし。

又、後日の脇の申楽には、昨日の脇に変れる風体をすべし。泣き申楽をば、後日などの中ほどに、よき時分を勘へてすべし。

問。申楽の勝負の立合の手立はいかに。

答。是、肝要なり。先、能数を持ちて、敵人の能に変りたる風体を、違へてすべし。序云「歌道を少したしなめ」とは、是なり。この芸能の作者別なれば、いかかる上手も心のままならず。自作なれば、言葉・振舞、案の内なり。されば、能をせん程の者の、和才あらば、申楽を作らん事、易かるべし。これ、此道の命也。

されば、いかなる上手も、能を持たざらん為手は、一騎当千の強物なりとも、軍陣にて兵具のなからん、是同じ。されば、手柄のせいれひ、立合に見ゆべし。敵方色めきたる能をすれば、静かに、模様変りて、詰め所のある能をすべし。かやうに、敵人の申楽に変へてすれば、いかに敵方の申楽よけれども、さのみには負くる事なし。もし能よく出で来れば、勝つ事は治定あるべし。

然ば、申楽の当座に於いても、能に上中下の差別あるべし。本説正しく、めづらしきが、幽玄にて、面白き所あらんを、よき能とは申べし。よき能を、よくしたらんが、しかも出で来たらんを、第一とすべし。能はそれ程になけれども、本説のままに、咎もなく、よくしたらんが、出で来たらむを、第二とすべし。能はゑせ能なれども、本説の悪き所を中中便りにして、骨を折りて、よくしたるを、第三とすべし。

　問。是に大なる不審あり。はや功入たる為手の、しかも名人なるに、只今の若為手の、立合に勝つ事あり。これ、不審也。

　答。これこそ、先に申つる三十以前の時分の花なれ。古き為手ははや花失せて古様なる時分に、めづらしき花にて勝つ事あり。真実の目利は見分くべし。さあらば、目利・目利かずの、批判の勝負になるべきか。

　さりながら、様あり。五十以来まで花の失せざらん程の為手には、いかなる若き花なりとも、勝つ事はあるまじ。ただ是、よき程の上手の、花の失せたるゆへに、負くる事あり。いかなる名木なりとも、花の咲かぬ時の木をや見ん。犬桜の一重なりとも、初花の色色と咲けるをや見ん。かやうの譬へを思ふ時は、一旦の花なりとも、立合に勝つは理なり。

されば、肝要、此道はただ花が能の命なるを、花の失するをも知らず、もとの名望ばかりを頼まん事、古為手の、返返誤りなり。物数をば似せたりとも、花のある様を知らざらんは、花咲かぬ時の草木を集めて見んがごとし。万木千草に於ひて、花の色もみなみな異なれども、面白しと見る心は、同じ花也。物数は少なくとも、一方の花を取り極めたらん為手は、一体の名望は久かるべし。されば、主の心には随分花ありと思へども、人の目に見ゆるる公案なからんは、田舎の花、藪梅などの、いたづらに咲き匂はんがごとし。

又、同上手なりとも、その内にて重重あるべし。たとひ随分極めたる上手・名人なりとも、この花の公案なからん為手は、上手にては通るとも、花は後まではあるまじきなり。公案を極めたらん上手は、たとへ能は下るとも、花は残るべし。花だに残らば、面白き所は一期あるべし。されば、まことの花の残りたる為手には、いかなる若き為手なりとも、勝つ事はあるまじき也。

　問。能に、得手得手とて、ことの外に劣りたる為手も、一向き上手に勝りたる所あり。これを上手のせぬは、かなはぬやらん、又すまじき事にてせぬやらん。

答。一切の事に、得手得手とて、生得得たる所あるものなり。位は勝りたれども、これはかなはぬ事あり。さりながら、これもただ、よき程の上手の事にての料簡なり。まことに能と工夫との極まりたらん上手は、などかいづれの向きをもせざらん。されば、能と工夫とを極めたる為手、万人が中にも一人もなきゆへ也。なき者、工夫はなくて、慢心あるゆへ也。

抑、上手にも悪き所あり、下手にもよき所かならずあるものなり。これを見る人もなし。主も知らず。上手は、名を頼み、達者に隠されて、悪き所を知らず。下手は、もとより工夫なければ、悪き所をも知らねば、よき所のたまたまあるをもわきまへず。されば、上手も下手も、たがひに人に尋ぬべし。さりながら、能と工夫を極めたらんは、これを知るべし。

いかなるをかしき為手なりとも、よき所ありと見ば、上手も是を学ぶべし。これ、第一の手立なり。もし、よき所を見たりとも、我より下手をば似すまじきと思ふ情識あらば、その心に繋縛せられて、我悪き所をも、いかさま知るまじきなり。これすなはち、極めぬ心なるべし。又、下手も、上手の悪き所もし見えば、「上手だにも悪き所あり。いはんや初心の我なれば、さこそ悪き所多かるらめ」と思ひて、これを恐れて、人にも尋ね、工夫をいたさば、いよいよ稽古になりて、能は早く上るべし。もし、さはなくて、「我はあれ体に悪き所をばすまじき物を」と慢心あらば、我よき所をも、真実知らぬ為手なるべし。吉所を知らねば、悪き所をも良しと思ふ也。さる程に、年は行けども、能は上らぬなり。是則、下手の心也。

されば、上手にだにも、上慢あらば能は下るべし。いはんやかなはぬ上慢をや。能能公案して思へ。「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」と工夫すべし。下手のよき所を取りて、上手の物数に入るる事、無上至極の理也。人の悪き所を見るだにも、我手本也。いはんやよき所をや。「稽古は強かれ、情識はなかれ」とは、これなるべし。

問。能に位の差別を知る事は、如何。

答。これ、目利の眼には、易く見ゆるなり。凡、位の上るとは、能の重重の事なれども、ふしぎに、十ばかりの能者にも、この位をのれと上れる風体あり。但、稽古なからんは、をのれと位ありともいたづら事也。まづ、稽古の功入て位のあらんは、常の事也。又、生得の位とは、長也。嵩と申は別の物也。多く、人、長と嵩とを同じやうに思ふ也。嵩と申は、ものものしく、勢ひのある形也。又云、嵩は一さいにわたる義也。位・長は別の物也。たとへば、生得幽玄なる所あり。これ、位也。しかれども、さらに幽玄にはなき為手の、長のあるもあり。これは幽玄ならぬ長也。

又、初心の人思ふべし。稽古に位を心がけんは、返返かなふまじ。位はいよいよかなはで、あまさへ、稽古しつる分も下るべし。所詮、位・長とは生得の事にて、得ずしては大かたかなふまじ。又、稽古の功入て、垢落ちぬれば、此位、をのれと出で来る事あり。稽古とは、音曲・舞・はたらき・物まね、かやうの品品を極むる形木也。

よくよく公案して思ふに、幽玄の位は生得の物か。だけたる位は功入たる所か。心中に案を廻らすべし。

問。文字に当たる風情とは、何事ぞや。

答。これ、細かなる稽古也。能にもろもろのはたらきとは、これ也。体拝・身づかひと申も、是也。

たとへば、言ひ事の文字にまかせて心をやるべし。「見る」といふ事には物を見、「指す」「引く」など云には手を指し引き、「聞」「音する」などには耳を寄せ、あらゆる事にまかせて身をつかへば、をのづからはたらきになる也。第一、身をつかふ事、第二、手をつかふ事、第三、足をつかふ事なり。節とかかりによりて、身の振舞を料簡すべし。これは筆に見えがたし。その時に至りて、見るまま習ふべし。

　この文字に当たる事を稽古し極めぬれば、音曲・はたらき、一心になるべし。所詮、音曲・はたらき一心と申事、これ又得たる所なり。堪能と申さんも、是なるべし。秘事なり。音曲とはたらきとは、二の心なるを、一心になる程達者に極めたらんは、無上第一の上手なるべし。是、まことに強き能なるべし。

　又、強き・弱き事、多く、人、紛らかす物也。能の品のなきをば強きと心得、弱きをば幽玄なると批判する事、おかしき事也。なにと見るも見弱りのせぬ為手あるべし。これ、強き也。なにと見るも花やかなる為手、是、幽玄なり。されば、此文字に当たる道理をし極めたらんは、音曲・はたらき一心になり、強き・幽玄の境、いづれもいづれも、をのづから極めたる為手なるべし。

問。常の批判にも、「しほれたる」と申事あり。いかやうなる所ぞや。

答。これは、ことに記すに及ばず。その風情あらはれまじ。さりながら、まさしく、しほれたる風体はある物也。是も、ただ花によりての風情なり。能能案じて見るに、稽古にも振舞にも及びがたし。花を極めたらば知るべきか。されば、あまねく物まねごとになしとも、一方の花を極めたらん人は、しほれたる所をも知る事あるべし。

　然ば、この「しほれたる」と申こと、花よりもなを上の事にも申つべし。花なくては、しほれ所無益なり。それは「湿りたる」になるべし。花のしほれたらんこそ面白けれ。花咲かぬ草木のしほれたらんは、なにか面白かるべき。されば、花を極めん事、一大事なるに、その上とも申べき事なれば、しほれたる風体、返返大事なり。さるほどに、譬へにも申がたし。

　古歌云、

薄霧の籬の花の朝じめり秋は夕と誰か言ひけん

　又云、

　　色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける

かやうなる風体にてやあるべき。心中にあてて公案すべし。

問。能に花を知る事、此条条を見るに、無上第一なり。肝要也。又は不審也。是、いかにとして心得べきや。

　答。此道の奥義を極むる所なるべし。一大事とも秘事とも、ただこの一道なり。

先、大かた、稽古・物学の条条にくはしく見えたり。時分の花、声の花、幽玄の花、かやうの条条は、人の目にも見えたれども、その態より出で来る花なれば、咲く花のごとくなれば、又やがて散る時分あり。されば、久しからねば、天下に名望少なし。ただ、まことの花は、咲く道理も散る道理も、心のままなるべし。されば久しかるべし。此理を知らむ事、いかがすべき。若、別紙の口伝にあるべきか。

ただ、わづらはしくは心得まじきなり。先、七歳よりこのかた、年来稽古の条条、物まねの品品を、能能心中にあてて分ち覚えて、能を尽くし、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし。この物数を極むる心、則花の種なるべし。されば、花を知らんと思はば、先種を知るべし。花は心、種は態なるべし。

　古人云、

　　心地含諸種　普雨悉皆萌

　　頓悟花情已　菩提果自成

凡、家を守り、芸を重んずるによて、亡父の申置きし事どもを、心底にさしはさみて、大概を録する所、世の謗りを忘れて、道の廃れん事を思ふによりて、全他人の才学に及ぼさんとにはあらず。ただ子孫の庭訓を残すのみなり。

風姿華伝条条　以上。

于時応永七年庚辰卯月十三日

従五位下左衛門大夫　秦元清書

風姿花伝第四神儀云

一、申楽、神代の始まりと云ぱ、天照太神、天の岩戸に籠り給ひし時、天下常闇に成しに、八百万の神達、天香具山に集り、大神の御心をとらんとて、神楽を奏し、細男を始め給ふ。中にも、天の鈿女の尊、進み出で給て、榊の枝に幣を付て、声を上げ、火処焼、踏み轟かし、神憑りすと、歌ひ舞奏で給ふ。その御声ひそかに聞えければ、大神、岩戸を少し開き給ふ。国土又明白たり。神達の御面白かりけり。其時の御遊び、申楽の始めと、云云。くはしくは口伝にあるべし。

　一、仏在所には、須達長者、祇園精舎を建てて供養の時、釈迦如来、御説法ありしに、提婆、一万人の外道を伴ひ、木の枝・篠の葉に幣を付て踊り叫めば、御供養伸べがたかりしに、仏、舎利弗に御目を加へ給へば、仏力を受け、御後戸にて、鼓・唱歌をととのへ、阿難の才覚、舎利弗の智恵、富楼那の辯説にて、六十六番の物まねをし紿へば、外道、笛・鼓の音を聞きて、後戸に集り、是を見て静まりぬ。其隙に、如来供養を伸べ給へり。それより、天竺に此道は始まるなり。

一、日本国に於いては、欽明天皇の御宇に、大和国泊瀬の河に洪水の折節、河上より一の壺流れ下る。三輪の杉の鳥居のほとりにて、雲客此壺を取る。中にみどり子あり。かたち柔和にして玉のごとし。是、降人なるがゆへに、内裏に奏聞す。其夜、御門の御夢にみどり子の云、「我はこれ、大国秦始皇の再誕なり。日域に機縁ありて今現在す」と云。御門奇特に思しめし、殿上に召さる。成人に従ひて、才智人に越えば、年十五にて大臣の位に上り、秦の姓を下さるる。「秦」といふ文字「はだ」なるがゆへに、秦河勝是也。

上宮太子、天下少し障りありし時、神代・仏在所の吉例に任て、六十六番の物まねを彼河勝に仰せて、同じく六十六番の面を御作にて、則河勝に与へ給ふ。橘の内裏紫震殿にてこれを勤ず。天下治まり、国静かなり。上宮太子、末代のため、神楽なりしを、「神」といふ文字の片を除けて、旁を残し給ふ。是、日暦の「申」なるがゆへに、「申楽」と名づく。すなはち、楽しみを申によりてなり。又は神楽を分くればなり。

彼河勝、欽明・敏達・用明・崇峻・推古・上宮太子に仕へ奉り、此芸をば子孫に伝へ、化人跡を留めぬによりて、摂津国難波の浦より、うつほ舟に乗りて、風にまかせて西海に出づ。播磨の国坂越の浦に着く。浦人舟を上げて見れば、かたち人間に変れり。諸人に憑き祟りて奇瑞をなす。則、神と崇めて、国豊也。「大きに荒るる」と書きて、大荒大明神と名付く。今の代に霊験あらた也。本地毘沙門天王にてまします。上宮太子、守屋の逆臣を平らげ給し時も、かの河勝が神通方便の手にかかりて守屋は失せぬ、と云云。

　一、平の都にしては、村上天皇の御宇に、昔の上宮太子の御筆の申楽延年の記を叡覧なるに、先、神代・仏在所の始まり、月氏・辰旦・日域に伝る狂言綺語を以て、讃仏転法輪の因縁を守り、魔縁を退け、福祐を招く。申楽舞を奏すれば、国穏やかに、民静かに、寿命長遠なりと、太子の御筆あらたなるによて、村上天皇、申楽を以て天下の御祈禱たるべきとて、その頃、彼河勝この申楽の芸を伝る子孫、秦氏安なり。六十六番申楽を紫震殿にて仕る。その比、紀の権の守と申人、才智の人なりけり。是は、かの氏安が妹婿なり。これをもあひ伴ひて申楽をす。

その後、六十六番までは一日に勤めがたしとて、その中を選びて、稲経の翁翁面、代経翁三番申楽、父助、これ三を定む。今の代の式三番、是也。則、法・報・応の三身の如来をかたどり奉る所也。式三番の口伝、別紙にあるべし。

秦氏安より、光太郎・金春まで、廿九代の遠孫なり。これ、大和国円満井の座也。同じく、氏安より相伝たる聖徳太子の御作の鬼面、春日の御神影、仏舎利、是三、この家に伝る所也。

一、当代に於ひて、南都興福寺の維摩会に、講堂にて法味を行ひ給ふ折節、食堂にて舞延年あり。外道を和らげ、魔縁を静む。その間に、食堂前にて彼御経を講給。すなはち祇園精舎の吉例なり。

然ば、大和国春日興福寺神事行ひとは、二月二日、同五日、宮寺に於ひて、四座の申楽、一年中の御神事始めなり。天下太平の御祈禱也。

一、大和国春日御神事相随申楽四座。

　　　外山　　結崎　　坂戸　　円満井

　一、江州日吉御神事相随申楽三座。

山階　　下坂　　比叡

一、伊勢、主司、二座。

　一、法勝寺御修正参勤申楽三座

河内住新座　　丹波本座　　摂津法成寺

此三座、同賀茂・住吉御神事にも相随。

奥義云

抑、風姿花伝の条条、大方、外見の憚、子孫の庭訓のため注すといへども、ただ望む所の本意とは、当世、この道の輩を見るに、芸のたしなみはをろそかにて、非道のみ行じ、たまたま当芸に至る時も、ただ、一夕の戯笑、一旦の名利に染みて、源を忘て流を失ふ事、道すでに廃る時節かと、これを嘆くのみなり。然ば、道をたしなみ、芸を重んずる所私なくば、などか其徳を得ざらん。殊更、此芸、その風を継ぐといへども、自力より出づる振舞あれば、語にも及がたし。その風を得て、心より心に伝る花なれば、風姿花伝と名付く。

凡、此道、和州・江州に於いて風体変れり。江州には、幽玄の境を取り立てて、物まねを次にして、かかりを本とす。和州には、先物まねを取り立てて、物数を尽くして、しかも幽玄の風体ならんと也。然ども、真実の上手は、いづれの風体なりとも洩れたる所あるまじきなり。一向きの風体斗をせん物は、まこと得ぬ人の態なるべし。

されば、和州の風体、物まね・儀理を本として、あるひは長のあるよそほひ、あるひ

は怒れる振舞、かくのごとくの物数を、得たる所と人も心得、たしなみも是専なれども、亡父の名を得し盛り、静が舞の能、嵯峨の大念仏の女物狂の物まね、殊殊得たりし風体なれば、天下の褒美・名望を得し事、世以て隠れなし。是、幽玄無上の風体なり。

　又、田楽の風体、ことに各別の事にて、見所も、申楽の風体には批判にも及ばぬと、みなみな思ひ慣れたれども、近代に此道の聖とも聞えし本座の一忠、ことにことに物数を尽くしける中にも、鬼神の物まね、怒れるよそほひ、洩れたる風体なかりけるとこそ承しか。然ば、亡父は、常常、一忠が事を、「我が風体の師なり」と、まさしく申し也。

されば、ただ、人ごとに、或は情識、或は得ぬゆへに、一向きの風体ばかりを得て、十体にわたる所を知らで、よその風体を嫌う也。是は、嫌うにはあらず、ただかなはぬ情識なり。されば、かなはぬゆへに、一体得たる程の名望を、一旦は得たれども、久しき花なければ、天下に許されず。堪能にて、天下の許されを得ん程の物は、いづれの風体をするとも、面白かるべし。風体・形木は面面各各なれども、面白き所はいづれにもわたるべし。此面白しと見るは花なるべし。是、和州・江州、又は田楽の能にも洩れぬ所也。されば、洩れぬ所を持ちたる為手ならでは、天下の許されを得ん事、あるべからず。

　又云、ことごとく物数を極めずとも、仮令、十分に七八分極めたらん上手の、その中にことに得たる風体を、我門弟の形木にし極めたらんが、しかも工夫あらば、これ又、天下の名望を得つべし。さりながら、げには、十分に足らぬ所あらば、都鄙・上下に於ひて、見所の褒貶の沙汰あるべし。

凡、能の名望を得る事、品品多し。上手は目利かずの心にあひかなふ事難し。下手は目利の眼に合ふ事なし。下手にて目利の眼にかなはぬは、不審あるべからず。上手の目利かずの心に合はぬ事、是は、目利かずの眼の及ばぬ所なれども、得たる上手にて工夫あらん為手ならば、又、目利かずの眼にも面白しと見るやうに能をすべし。この工夫と達者とを極めたらん為手をば、花を極めたるとや申べき。されば、此位に至らん為手は、いかに年寄りたりとも、若き花に劣る事あるべからず。されば、この位を得たらん上手こそ、天下にも許され、又、遠国・田舎の人までも、あまねく面白しとは見るべけれ。此工夫を得たらん為手は、和州へも江州へも、若は田楽の風体までも、人の好み・望みによりて、いづれにもわたる上手なるべし。此たしなみの本意をあらはさんがため、風姿花伝を作する也。

　かやうに申せばとて、我風体の形木のをろそかならむは、ことにことに能の命あるべからず。是、弱き為手なるべし。我風体の形木を極めてこそ、あまねき風体をも知りたるにてはあるべけれ。あまねき風体を心にかけんとて、我形木に入ざらん為手は、我が風体を知らぬのみならず、よその風体をも、確かにはまして知るまじき也。されば、能弱くて、久しく花はあるべからず。久しく花のなからんは、いづれの風体をも知らぬに同じがるべし。然ば、花伝の花の段に、「物数を尽くし、工夫を極めて後、花の失せぬ所をば知るべし」と言へり。

秘義云、抑、芸能とは、諸人の心を和らげて、上下の感をなさむ事、寿福増長の基、遐齢延年の方なるべし。極め極めては、諸道悉寿福延長ならんとなり。殊更この芸、位を極めて、家名を残す事、是、天下の許されなり。是、寿福増長なり。

しかれども、ことに故実あり。上根上智の眼に見ゆるる所、長・位の極まりたる為手に於きては、相応至極なれば、是非なし。凡、愚かなる輩、遠国・田舎の卑しき眼には、この長・位の上れる風体、及がたし。是をいかがすべき。この芸とは、衆人愛敬を以て、一座建立の寿福とせり。故に、あまり及ばぬ風体のみなれば、又諸人の褒美欠けたり。此ために、能に初心を忘れずして、時に応じ、所によりて、愚かなる眼にもげにもと思ふやうに能をせん事、これ寿福也。よくよく此風俗の極めを見るに、貴所・山寺、田舎・遠国、諸社の祭礼に至るまで、をしなべて謗りを得ざらんを、寿福達人の為手とは申べきや。されば、いかなる上手なりとも、衆人愛敬欠けたる所あらむをば、寿福増長の為手とは申がたし。しかれば、亡父は、いかなる田舎・山里の片辺にても、その心を受けて、所の風義を一大事にかけて、芸をせしなり。

　かやうに申せばとて、初心の人、それ程はなにとて左右なく極むべきとて、退屈の儀はあるべからず。この条条を心底に宛てて、その理をちちと取りて、了簡を以て、我分力に引き合はせて、工夫をいたすべし。

　凡、今の条条・工夫は、初心の人よりは猶上手に於きての故実・工夫なり。たまたま得たる上手になりたる為手も、身を頼み、名に化かされて、此故実なくて、いたづらに名望ほどは寿福欠けたる人多きゆへに、是を嘆くなり。得たる所あれども、工夫なくてはかなはず。得て工夫を極めたらんは、花に種を添へたらんがごとし。

　たとひ、天下に許されを得たる程の為手も、力なき因果にて、万一少し廃るる時分ありとも、田舎・遠国の褒美の花失せずば、ふつと道の絶ふる事はあるべからず。道絶えずば、又天下の時に合ふ事あるべし。

　一、此寿福増長のたしなみと申せばとて、ひたすら世間の理にかかりて、若欲心に住せば、これ、第一、道の廃るべき因縁なり。道のためのたしなみには、寿福増長あるべし。寿福のためのたしなみには、道まさに廃るべし。道廃らば、寿福をのづから滅すべし。正直円明にして世上万徳の妙花を開く因縁なりと、たしなむべし。

凡、花伝の中、年来稽古より始めて、この条条を注す所、全自力より出づる才学ならず。幼少より以来、亡父の力を得て人と成りしより、廿余年が間、目に触れ、耳に聞き置しまま、その風を受けて、道のため、家のため、是を作する所、私あらむものか。

于時応永第九之暦暮春二日馳筆畢　　　　　　世阿有判

花伝第六花修

一、能の本を書く事、この道の命なり。極めたる才学の力なけれども、ただ工みによりて、よき能にはなるもの也。

　大かたの風体、序破急の段に見えたり。ことさら、脇の申楽、本説正しくて、開口より、その謂れと、やがて人の知るごとくならんずる来歴を書くべし。さのみに細かなる風体を尽くさずとも、大かたのかかり直に下りたらんが、指寄り花花とあるやうに、脇の申楽をば書くべし。又、番数に至りぬれば、いかにもいかにも、言葉・風体を尽くして、細かに書くべし。

仮令、名所・旧跡の題目ならば、その所によりたらんずる詩歌の、言葉の耳近からんを、能の詰め所に寄すべし。為手の言葉にも風情にもかからざらん所には、肝要の言葉をば載すべからず。なにとしても、見物衆は、見る所も聞く所も、上手をならでは心にかけず。さるほどに、棟梁の面白き言葉・振り、目にさゑぎり、心に浮かめば、見聞く人、すなはち感を催すなり。これ、第一、能を作る手立なり。

ただ、優しくて、理のすなはちに聞ゆるやうならんずる、詩歌の言葉を取るべし。優しき言葉を振りに合わすれば、ふしぎに、をのづから、人体も幽玄の風情になる物也。硬りたる言葉は、振りに応ぜず。しかあれども、硬き言葉の耳遠きが、又よき所あるべし。それは、本木の人体よりて似合ふべし。漢家・本朝の来歴に従つて心得分くべし。ただ、卑しく俗なる言葉、風体悪き能になる物也。

　しかれば、よき能と申は、本説正しく、めづらしき風体にて、詰め所ありて、かかり幽玄ならんを、第一とすべし。風体はめづらしからねども、わづらはしくもなく、直に下りたるが、面白き所あらんを、第二とすべし。これは、おほよその定めなり。ただ能は、一風情、上手の手にかかり、便りだにあらば、面白かるべし。番数を尽くし、日を重ぬれば、たとひ悪き能も、めづらしくし替へし替へ色取れば、面白く見ゆべし。されば、能は、ただ、時分・入れ場なり。悪き能とて捨つべからず。為手の心づかいなるべし。

ただし、ここに様あり。善悪にすまじき能あるべし。いかなる物まねなればとて、仮令、老尼・姥・老僧などの形にて、さのみは狂い怒る事あるべからず。又、怒れる人体にて、幽玄の物まね、これ同じ。これを、まことのゑせ能、きやうさうとは申べし。此心、二の巻の物狂の段に申たり。

又、一さいの事に、相応なくば成就あるべからず。よき本木の能を、上手のしたらんが、しかも出で来たらんを、相応とは申べし。されば、よき能を上手のせん事、などか出で来ざらんと、皆人思ひ慣れたれ共、ふしぎに、出で来ぬことある物也。これを、目利は見分けて、為手の咎もなき事を知れども、ただ大かたの人は、能も悪く、為手もそれほどにはなしと見る也。抑、よき能を上手のせん事、なにとて出で来ぬやらんと工夫するに、もし、時分の陰陽の和せぬ所か。又は花の公案なきゆへか。不審なを残れり。

一、作者の思ひ分くべき事あり。ひたすら静かなる本木の音曲ばかりなると、又、舞・はたらきのみなるとは、一向きなれば、書きよき物なり。音曲にてはたらく能あるべし。これ一大事也。真実面白しと感をなすは、これ也。聞く所は耳近に、面白き言葉にて、節のかかりよくて、文字移りの美しく続きたらんが、ことさら、風情を持ちたる詰めをたしなみて書くべし。この数数相応する所にて、諸人一同に感をなす也。

さるほどに、細かに知るべきことあり。風情を博士にて音曲をする為手は、初心の所なり。音曲よりはたらきの生ずるは、功入りたるゆへ也。音曲は聞く所、風体は見る所也。一さいの事は、謂れを道にしてこそ、よろづの風情にはなるべき理なれ。謂れをあらはすは言葉なり。さるほどに、音曲は体なり、風情は用なり。しかれば、音曲よりはたらきの生ずるは、順也。はたらきにて音曲をするは、逆なり。諸道・諸事に於いて、順・逆とこそ下るべけれ。逆・順とはあるべからず。返返、音曲の言葉の便りを以て、風体を色取り給べき也。これ、音曲・はたらき一心になる稽古なり。

さるほどに、能を書く所に又工夫あり。音曲よりはたらきを生ぜさせんがため、書く所をば、風情を本に書くべし。風情を本に書きて、さてその言葉を謡ふ時には、風情をのづから生ずべし。しかれば、書く所をば、風情を先立てて、しかも謡の節・かかりよきやうにたしなむべし。さて、当座の芸能に至る時は、又、音曲を先とすべし。かやうにたしなみて、功入りぬれば、謡ふも風情、舞ふも音曲になりて、万曲一心たる達者となるべし。これ又、作者の高名也。

一、能に、強き・幽玄、弱き・荒きを知る事。大かたは見えたることなれば、たやすきやうなれ共、真実これを知らぬによりて、弱く、荒き為手多し。

　まづ、一さいの物まねに、偽る所にて、荒くも弱くもなると知るべし。この堺、よきほどの工夫にては紛るべし。よくよく、心底を分けて案じ納むべき事也。

　まづ、弱かるべき事を強くするは、偽りなれば、これ荒きなり。強かるべき事に強きは、これ強き也。荒きにはあらず。もし、強かるべきことを幽玄にせんとて、物まね似たらずば、幽玄にはなくて、これ弱き也。さるほどに、ただ物まねにまかせて、その物になり入て、偽りなくば、荒くも弱くもあるまじきなり。

又、強かるべき理過ぎて強きは、ことさら荒きなり。幽玄の風体よりなを優しくせんとせば、これ、ことさら弱きなり。

この分け目をよくよく見るに、幽玄と強きと、別にあるものと心得るゆへに、迷ふ也。この二つは、その物の体にあり。たとへば、人に於いては、女御・更衣、又は遊女・好色・美男、草木には花の類、かやうの数数は、その形幽玄の物なり。又、あるいは物のふ・荒夷、あるいは鬼・神、草木にも松・杉、かやうの数数の類は、強き物と申べきか。かやうの万物の品品を、よくし似せたらんは、幽玄の物まねは幽玄になり、強きはをのづから強かるべし。この分け目をば宛てがはずして、ただ幽玄にせんと斗心得て、物まねおろそかなれば、それに似ず。似ぬをば知らで、幽玄にするぞと思ふ心、これ弱きなり。されば、遊女・美男などの物まねをよく似せたらば、をのづから幽玄なるべし。ただ、似せんと斗思ふべし。又、強き事をも、よく似せたらんは、をのづから強かるべし。

ただし、心得べき事あり。力なく、この道は見所を本にする態なれば、その当世当世の風儀にて、幽玄をもてあそぶ見物衆の前にては、強き方をば、少し物まねにはづるるとも、幽玄の方へは遣らせ給ふべし。

この工夫を以て、作者又心得べきことあり。いかにも、申楽の本木には、幽玄ならん人体、まして心・言葉をも優しからんを、たしなみて書くべし。それに偽りなくば、をのづから幽玄の為手と見ゆべし。幽玄の理を知り極めぬれば、をのれと強き所をも知るべし。されば、一さいの似せ事をよく似すれば、よそ目に危き所なし。危からぬは強きなり。

　しかれば、ちちとある言葉の響きにも、「靡き」「臥す」「帰る」「寄る」などいふ言葉は、柔かなれば、をのづから余情になるやうなり。「落つる」「崩るる」「破るる」「転ぶ」など申は、強き響きなれば、振りも強がるべし。

　さるほどに、強き・幽玄と申は、別にあるものにあらず、ただ物まねの直なる所、弱き・荒きは、物まねにはづるる所と知るべし。

この宛てがいを以て、作者も、発端の句、一声・和歌などに、人体の物まねによりて、いかにも幽玄なる余情・便りを求むる所に、荒き言葉を書き入れ、思ひの外にいりほがなる梵語・漢音などを載せたらんは、作者の僻事なり。定めて、言葉のままに風情をせば、人体に似合はぬ所あるべし。ただし、堪能の人は、この違い目を心得て、けうがる故実にて、なだらかなるやうにしなすべし。それは為手の高名なり。作者の僻事は逃るべからず。又、作者は心得て書けども、もし為手の心なからんに至りては、沙汰の外なるべし。これはかくのごとし。

　又、能によりて、さして細かに言葉・義理にかからで、大様にすべき能あるべし。さやうの能をば、直に舞い謡い、振りをもするするとなだらかにすべし。かやうなる能を又細かにするは、下手の態なり。これ又能の下る所と知るべし。しかれば、よき言葉・余情を求むるも、義理・詰め所のなくてはかなはぬ能に至りての事也。直なる能には、たとひ、幽玄の人体にて硬き言葉を謡ふとも、音曲のかかりだに確やかならば、これ、よかるべし。これすなはち、能の本様と心得べき事なり。ただ、返返、かやうの条条を極め尽くして、さて大様にするならでは、能の庭訓あるべからず。

一、能のよき・悪しきにつけて、為手の位によりて、相応の所を知るべき也。

文字・風体を求めずして、大様なる能の、本説ことに正しくて、大きに位の上れる能あるべし。かやうなる能は、見所さほど細かになき事あり。これには、よきほどの上手も似合はぬ事あり。たとひ、これに相応するほどの無上の上手なりとも、又、目利・大所にてなくば、よく出で来る事あるべからず。これ、能の位、為手の位、目利・在所・時分、ことごとく相応せずば、出で来る事は左右なくあるまじき也。

　又、小さぎ能の、さしたる本説にてはなけれ共、幽玄なるが、細細としたる能あり。これは、初心の為手にも似合ふ物也。在所も、自然、片辺りの神事、夜などの庭に相応すべし。よきほどの見手も、能の為手も、これに迷ひて、自然、田舎・小所の庭にて面白ければ、その心慣らひにて、押し出だしたる大所、貴人の御前などにて、あるいはひいき興行して、思ひの外に能悪ければ、為手にも名を折らせ、我も面目なき事ある物なり。

　しかれば、かやうなる品品・所所を限らで、甲乙なからんほどの為手ならでは、無上の花を極めたる上手とは申べからず。さるほどに、いかなる座敷にも相応するほどの上手に至りては、是非なし。

　又、為手によりて、上手ほどは能を知らぬ為手もあり、能よりは能を知るもあり。貴所・大所などにて、上手なれ共、能をし違へ、ちちのあるは、、能を知らぬゆへ也。又、それほどに達者にもなく、物少ななる為手の、申さば初心なるが、大庭にても花失せず、諸人の褒美いや増しにて、さのみに斑のなからんは、為手よりは能を知りたるゆへなるべし。

さるほどに、この両様の為手を、とりどりに申事あり。しかれ共、貴所・大庭などにて、あまねく能のよからんは、名望長久なるべし。さあらんにとりては、上手の、達者ほどは我が能を知らざらんよりは、少し足らぬ為手なりとも、能を知りたらんは、一座建立の棟梁には勝るべきか。能を知りたる為手は、我が手柄の足らぬ所をも知るゆへに、大事の能に、かなはぬ事をば斟酌して、得たる風体ばかりを先立てて、仕立よければ、見所の褒美かならずあるべし。さて、かなはぬ所をば、小所・片辺りの能にし慣らふべし。かやうに稽古すれば、かなはぬ所も、功入れば、自然自然にかなふ時分あるべし。さるほどに、終には、能に嵩も出で来、垢も落ちて、いよいよ名望も一座も繁昌する時は、定めて、年行くまで花は残るべし。これ、初心より能を知るゆへ也。能を知る心にて、公案を尽くして見ば、花の種を知るべし。しかれども、この両様は、あまねく人の心心にて、勝負をば定め給べし。

花修　已上。

此条条、心ざしの芸人より外は、一見をも許すべからず。　　世阿（花押）

花伝第七別紙口伝

この口伝に花を知ること。まづ、仮令、花の咲くを見て、よろづに花とたとえ始めし理をわきまうべし。

そもそも、花といふに、万木千草に於いて、四季折節に咲く物なれば、その時を得てめづらしきゆゑに、もてあそぶなり。申楽も、人の心にめづらしきと知る所、すなはち面白き心なり。花と、面白きと、めづらしきと、これ三つは同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散るゆゑによりて、咲く頃あればめづらしきなり。能も、住する所なきを、まづ花と知るべし。住せずして、余の〔風体〕に移れば、めづらしきなり。

ただし、様あり。めづらしきと言えばとて、世になき風体をし出だすにてはあるべからず。花伝に出だす所の条条を、ことごとく稽古し終りて、さて申楽をせん時に、その物数を、用用に従いて取り出だすべし。花と申すも、よろづの草木に於いて、いづれか四季折節の時の花の外にめづらしき花のあるべき。そのごとくに、習い覚えつる品品を極めぬれば、時折節の当世を心得て、時の人の好みの品によりて、その風体を取り出だす、これ、時の花の咲くを見んがごとし。花と申すも、去年咲きし種なり。能も、もと見し風体なれども、物数を極めぬれば、その数を尽くすほど久しし。久しくて見れば、まためづらしきなり。

その上、人の好みも色色にして、音曲・振舞・物まね、所所に変りてとりどりなれば、いづれの風体をも残してはかなふまじきなり。しかれば、物数を極め尽くしたらん為手は、初春の梅より、秋の菊の花の咲き果つるまで、一年中の花の種を持ちたらんがごとし。いづれの花なりとも、人の望み、時によりて、取り出だすべし。物数を極めずば、時によりて花を失うことあるべし。たとへば、春の花の頃過ぎて、夏草の花を賞翫せんずる時分に、春の花の風体ばかりを得たらん為手が、夏草の花はなくて、過ぎし春の花をまた持ちて出でたらんは、時の花に合ふべしや。これにて知るべし。

ただ、花は、見る人の心にめづらしきが花なり。しかれば、花伝の花の段に、「物数を極めて、工夫を尽くして後、花の失せぬ所をば知るべし」とあるは、この口伝也。されば、花とて別にはなきものなり。物数を尽くして、工夫を得て、めづらしき感を心得るが花なり。「花は心、種は態」と書けるも、これなり。

　物まねの鬼の段に、「鬼ばかりをよくせん者は、鬼の面白き所をも知るまじき」とも申したる也。物数を尽くして、鬼をめづらしくし出だしたらんは、めづらしき所花なるべきほどに、面白かるべし。余の風体はなくて、鬼ばかりをする上手と思はば、よくしたりとは見ゆるるとも、めづらしき心あるまじければ、見所に花はあるべからず。「巌に花の咲かんがごとし」と申したるも、鬼をば、強く、恐ろしく、肝を消すやうにするならでは、をよその風体なし。これ、巌なり。花といふは、余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と人の思い慣れたる所に、思いの外に鬼をすれば、めづらしく見ゆるる所、これ花なり。しかれば、鬼ばかりをせんずる為手は、巌ばかりにて、花はあるべからず。

一、細かなるロ伝に云はく。音曲・舞・はたらき・振り・風情、これまた同心なり。これは、いつもの風情・音曲なれば、「さやうにぞあらんずらん」と、人の思い慣れたる所を、さのみに住せずして、心根に、同じ振りながら、もとよりは軽軽と風体をたしなみ、いつもの音曲なれども、なを故実をめぐらして、曲を色どり、声色をたしなみて、我が心にも「今ほどに執することなし」と、大事にしてこの態をすれば、見聞く人、「常よりもなを面白き」など、批判に合ふことあり。これは、見聞く人のため、めづらしき心にあらずや。

しかれば、同じ音曲・風情をするとも、上手のしたらんは、別に面白かるべし。下手は、もとより習い覚えつる節博士の分なれば、めづらしき思ひなし。上手と申すは、同じ節がかりなれども、曲を心得たり。曲というは、節の上の花なり。同じ上手、同じ花の内にても、無上の公案を極めたらんは、なを勝つ花を知るべし。をよそ、音曲にも、節は定まれる形木、曲は上手のもの也。舞にも、手は習へる形木、品かかりは上手の物なり。

一、物まねに、似せぬ位あるべし。物まねを極めて、その物にまことに成り入りぬれば、似せんと思ふ心なし。さるほどに、面白き所ばかりをたしなめば、などか花なかるべき。たとへば、老人の物まねならば、得たらん上手の心には、ただ、素人の老人が風流延年なんどに身を飾りて舞い奏でんがごとし。もとより己が身が年寄ならば、年寄に似せんと思う心はあるべからず。ただその時の物まねの人体ばかりをこそたしなむべけれ。

また、老人の、花はありて年寄と見ゆるる口伝といふは、まづ、善悪、老したる風情をば心にかけまじきなり。そもそも、舞・はたらきと申すは、よろづに、楽の拍子に合はせて、足を踏み、手を指し引き、振り・風情を拍子に当ててするものなり。年寄りぬれば、その拍子の当て所、大鼓・歌・鼓の頭よりは、ちちと遅く足を踏み、手をも指し引き、をよその振り・風情をも、拍子に少し後るるやうにあるものなり。この故実、なによりも年寄の形木なり。この宛てがいばかりを心中に持ちて、その外をば、ただ世の常に、いかにもいかにも花やかにすべし。まづ、仮令も、年寄の心には、何事をも若くしたがるものなり。さりながら、力なく、五体も重く、耳も遅ければ、心は行けども振舞のかなわぬなり。この理を知ること、まことの物まねなり。態をば、年寄の望みのごとく、若き風情をすべし。これ、年寄の若きことを羨める心・風情を学ぶにてはなしや。年寄は、いかに若振舞をすれども、この拍子に後るることは、力なく、かなはぬ理なり。年寄の若振舞、めづらしき理なり。老木に花の咲かんがごとし。

一、能に十体を得べきこと。十体を得たらん為手は、同じことを一迴り一廻りづつするとも、その一通りの間久しかるべければ、めづらしかるべし。十体を得たらん人は、その内の故実・工夫にては、百色にもわたるべし。まづ、五年・三年の内に一遍づつも、めづらしくし替うるやうならんずる宛てがいを持つべし。これは、大きなる安立なり。または、一年の内、四季折節をも心にかくべし。また、日を重ねたる申楽、一日の内は申に及ばず、風体の品品を色どるべし。かやうに、大綱より初て、ちちとあることまでも、自然自然に心にかくれば、一期、花は失せまじきなり。

　又云、十体を知らんよりは、年年去来の花を忘べからず。年年去来の花とは、たとへば、十体とは物まねの品品なり。年年去来とは、幼なかりし時のよそをい、初心の時分の態、手盛りの振舞、年寄りての風体、この、時分時分の、をのれと身にありし風体を、みな当芸に一度に持つことなり。ある時は児・若族の能かと見え、ある時は年盛りの為手かと覚え、または、いかほども﨟たけて、功入りたるやうに見えて、同じ主とも見えぬやうに能をすべし。これすなはち、幼少の時より老後までの芸を、一度に持つ理なり。さるほどに、年年去り来る花とは言へり。

　ただし、この位に至れる為手、上代・末代に、見も聞きも及ばず。亡父の若盛りの能こそ、﨟たけたる風体、ことに得たりけるなど、聞き及びしか。四十有余の時分よりは、見慣れしことなれば、疑いなし。自然居士の物まねに、高座の上にての振舞を、時の人、「十六七の人体に見ゑし」なんど、沙汰ありしなり。これは、まさしく人も申し、身にも見たりしことなれば、この位に相応したりし達者かと覚えしなり。かやうに、若き時分には行く末の年年去来の風体を得、年寄りては過ぎし方の風体を身に残す為手、二人とも、見も聞きも及ばざりしなり。

されば、初心よりのこのかたの、芸能の品品を忘れずして、その時時、用用に従て取り出だすべし。若くては年寄の風体、年寄りては盛りの風体を残すこと、めづらしきにあらずや。しかれば、芸能の位あがれば過ぎし風体をし捨てし捨て忘るること、ひたすら花の種を失ふなるべし。その時時にありし花のままにて、種なければ、手折れる枝の花のごとし。種あらば、年年時時の頃に、などか逢はざらん。ただ、返す返す、初心を忘るべからず。されば、常の批判にも、若き為手をば、「早く上りたる」「功入りたる」など褒め、年寄りたるをば、「若やぎたる」など批判するなり。これ、めづらしき理ならずや。十体のうちを色どらば、百色にもなるべし。その上に、年年去来の品品をー身当芸に持ちたらんは、いかほどの花ぞや。

一、能に、よろづ用心を持つべきこと。仮令、怒れる風体にせん時は、柔かなる心を忘るべからず。これ、いかに怒るとも、荒かるまじき手立なり。怒れるに柔かなる心を持つこと、めづらしき理なり。また、幽玄の物まねに、強き理を忘るべからず。これ、一さい、舞・はたらき・物まね、あらゆることに住せぬ理なり。

また、身をつかう内にも心根あるべし。身を強く動かす時は、足踏を盗むべし。足を強く踏む時は、身をば静かに持つべし。これは筆に見ゑがたし。相対しての口伝なり。是は花習の題目にくわしく見えたり。

一、秘する花を知ること。「秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず」となり。この分け目を知ること、肝要の花なり。

　そもそも、一さいの事、諸道に於いて、その家家に秘事と申すは、秘するによりて大用あるがゆゑなり。しかれば、秘事といふことをあらはせば、させることにてもなきものなり。これを、「させることにてもなし」と言ふ人は、いまだ秘事といふことの大用を知らぬがゆゑなり。

まづ、この花の口伝に於きても、ただめづらしきが花ぞと皆人知るならば、「さてはめづらしきことあるべし」と思い設けたらん見物衆の前にては、たといめづらしきことをするとも、見手の心にめづらしき感はあるべからず。見る人のため花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。されば、見る人は、ただ思いの外に面白き上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、為手の花なり。さるほどに、人の心に思いも寄らぬ感を催す手立、これ花なり。

　たとへば、弓矢の道の手立にも、名将の案・計らいにて、思いの外なる手立にて、強敵にも勝つことあり。これ、負くる方のためには、めづらしき理に化かされて破らるるにてはあらずや。これ、一さいの事、諸道芸に於いて、勝負に勝つ理なり。かやうの手立も、事落居して、かかる計り事よと知りぬれば、その後はたやすけれども、いまだ知らざりつるゆゑに負くるなり。さるほどに、秘事とて、一つをば我が家に残すなり。

ここを以て知るべし。たとへあらはさずとも、かかる秘事を知れる人よとも、人には知られまじきなり。人に心を知られぬれば、敵人油断せずして用心を持てば、かゑて敵に心をつくる相なり。敵方用心をせぬ時は、こなたの勝つこと、なほたやすかるべし。人に油断をさせて勝つことを得るは、めづらしき理の大用なるにてはあらずや。さるほどに、我が家の秘事とて、人に知らせぬを以て、生涯の主になる花とす。秘すれば花、秘せねば花なるべからず。

一、因果の花を知ること、極めなるべし。一さいみな因果なり。初心よりの芸能の数数は因なり。能を極め、名を得ることは果なり。しかれば、稽古する所の因をろそかなれば、果を果たすことも難し。これをよくよく知るべし。

また、時分にも恐るべし。去年盛りあらば、今年は花なかるべきことを知るべし。時の間にも、男時・女時とてあるべし。いかにすれども、能にも、よき時あれば、かならず悪きことまたあるべし。これ、力なき因果なり。これを心得て、さのみに大事になからん時の申楽には、立合勝負に、それほどに我意執を起さず、骨をも折らで、勝負に負くるとも心にかけず、手を貯いて、少な少なと能をすれば、見物衆も、「これはいかやうなるぞ」と思い醒めたる所に、大事の申楽の日、手立を変えて、得手の能をして、せいれいを出だせば、これまた、見る人の思いの外なる心出で来れば、肝要の立合、大事の勝負に、定めて勝つことあり。これ、めづらしき大用なり。このほど悪かりつる因果に、またよきなり。

をよそ、三日に三庭の申楽あらん時は、指寄りの一日なんどは、手を貯いてあいしらいて、三日の内にことに折角の日と覚しからん時、よき能の、得手に向きたらんを、眼精を出だしてすべし。一日の内にても、立合なんどに、自然、女時に取り合いたらば、初めをば手を貯いて、敵の男時、女時に下る時分、よき能を揉み寄せてすべし。その時分、またこなたの男時に返る時分なり。ここにて能よく出で来ぬれば、その日の第一をすべし。

この男時・女時とは、一さいの勝負に、定めて、一方色めきてよき時分になることあり。これを男時と心得べし。勝負の物数久しければ、両方へ移り変り移り変りすべし。あるものに云はく、「勝負神とて、勝つ神・負くる神、勝負の座敷を定めて守らせ給ふべし」。弓矢の道に宗と秘することなり。敵方の申楽よく出で来たらば、勝神あなたにましますと心得て、まづ恐れをなすべし。これ、時の間の因果の二神にてましませば、両方へ移り変り移り変りて、また我が方の時分になると思はん時に、頼みたる能をすべし。これすなはち、座敷の内の因果なり。返す返す、をろそかに思ふべからず。信あれば徳あるべし。

一、抑、因果とて、よき・悪しき時のあるも、公案を尽くして見るに、ただ、めづらしき・めづらしからぬの二つなり。同じ上手にて、同じ能を、昨日・今日見れども、面白やと見えつることの、今また面白くもなき時のあるは、昨日面白かりつる心慣らい、今日はめづらしからぬによりて、悪しと見るなり。その後またよき時のあるは、先に悪かりつるものをと思う心、まためづらしきにかへりて、面白くなるなり。されば、この道を極め終りて見れば、花とて別にはなきものなり。奥義を極めて、よろづにめづらしき理を我れと知るならでは、花はあるべからず。

　経に云はく、「善悪不二、邪正一如」とあり。本来よりよき・悪しきとは、なにを以て定むべきや。ただ時によりて、用足る物をばよき物とし、用足らぬを悪しき物とす。この風体の品品も、当世の数人、所所にわたりて、その時のあまねき好みによりて取り出だす風体、これ、用足るための花なるべし。ここにこの風体をもてあそめば、かしこにまた余の風体を賞翫す。これ、人人心心の花なり。いづれをまことにせんや。ただ時に用ゆるを以て花と知るべし。

一。此別紙の口伝、当芸に於いて、家の大事、一代一人の相伝なり。たとい一子たりといふとも、無器量の者には伝ふべからず。「家、家にあらず。継ぐを以て家とす。人、人にあらず、知るを以て人とす」と言ゑり。これ、万徳了達の妙花を極むる所なるべし。

一、此別紙条条、先年弟四郎相伝すると云へども、元次芸能感人たるによて、是を又伝所也。秘伝秘伝。

応永廿五年六月一日　　　　　世（花押）